

## 論文内容要旨

論文題名 昭和大学藤が丘病院における10年間の皮膚腫瘍の疫学的検討  
—術前臨床診断と病理組織診断の一致率を含めて—

掲載雑誌名 昭和学会誌 掲載予定

内科系 (皮膚科学専攻) 笠 ゆりな

皮膚には様々な成分に由来する多様な腫瘍が生じる。こうした皮膚腫瘍の内訳および臨床・病理診断の整合性を明らかにする目的で10年間の症例について検討を加えた。2008年1月より2017年12月までに昭和大学藤が丘病院皮膚科で摘出術を行い、病理組織学的検討を加えた2449名(男性1171名, 女性1278名, 年齢11カ月~99歳, 平均年齢56.5 S.D. ±20.6歳)から摘除した2504病変を対象とした。摘除した病変から作成された病理組織標本を検討し病理組織学的診断を下した。診断結果を良性腫瘍, 悪性腫瘍, 非腫瘍性病変の3群に分類し, 各診断群における臨床診断と病理組織診断の一致率について検討を加えた。2504病変中1837例(73.4%)が良性腫瘍, 590例(23.6%)が悪性腫瘍, 77例(3.1%)が非腫瘍性変化であった。悪性腫瘍の疾患別は基底細胞癌163例(27.6%), 光線角化症132例(22.4%), Bowen病91例(15.4%), 有棘細胞癌45例(7.6%), 悪性黒色腫27例(4.6%)の順に多かった。基底細胞癌は若干男性例が多く, 発症部位は露光部が66.3%であった。光線角化症は露光部発症例が91.7%であったのに対して, Bowen病では14.3%で83.5%は軀幹, 四肢に生じていた。有棘細胞癌は平均年齢が81.9歳と最も高く, 53.3%が露光部に生じていた。年齢別の検討では, 悪性腫瘍は50代までは50例未満であったが, 加齢に伴って上昇し, 80歳以上では201例で摘除した検体の66.1%を占めた。臨床診断群/病理組織学的診断群の検討では, 臨床的に良性腫瘍と診断した1889例における診断一致率は93.3%(1762/1889)で, 不一致だった127例のうち62例(3.3%)は悪性腫瘍, 65例(3.4%)は非腫瘍性変化であった。臨床的に悪性腫瘍と診断した605例の診断一致率は87.1%(527/605)で, 不一致だった72例のうち66例(10.9%)は良性腫瘍, 12例(2.0%)は非腫瘍性変化であった。臨床的に良性腫瘍と誤診断した悪性腫瘍62例は, 有棘細胞癌10例, 悪性黒色腫10例, 基底細胞癌9例の順に多かった。悪性黒色腫では10例中8例は母斑細胞母斑と診断されていたが, 典型的なダーモスコピー所見を呈さない手掌, 指趾などの色素斑には特に注意が必要と考えられた。基底細胞癌は, 顔面に生じた4例中3例が母斑細胞母斑と診断されていたが, 特徴的な臨床像やダーモスコピー所見に乏しい初期病変であった。また良性と誤診された基底細胞癌の9例中5例は顔面以外の非好発部位に生じていた。悪性腫瘍を臨床的に良性腫瘍と誤診断するリスクを減らすためには, 未完成な初期病変や出血による修飾, 非好発部位発症の可能性などを念頭に置き, 部位に応じた慎重な対応を行うことが必要と考えられる。